

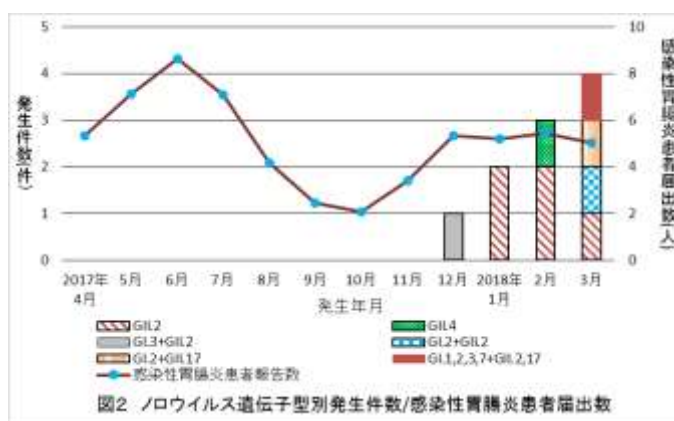
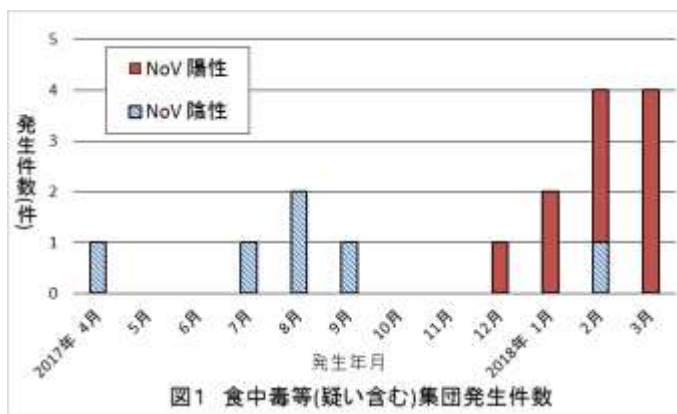
2017年度(平成29年度)ノロウイルス等検出状況

2018年(平成30年)3月31日現在
環境保全研究所

2017年度(平成29年度)に発生したノロウイルス等による食中毒等集団感染事例(疑い事例も含む)の調査において、当所で16事例のノロウイルス検査を実施したので、その検出状況を報告する。

16事例のうちノロウイルスが検出されたのは10事例(62.5%)で、主に冬季(12月以降)に発生した事例であった。春季(4月)と夏季(7月~9月)にも集団感染を疑う事例は発生したが、いずれもノロウイルス等は検出されなかった。

図2は、検出されたノロウイルスの遺伝子型別発生件数と定点あたりの感染性胃腸炎患者届出数(定点あたりの報告数)を示した。ゲノグループ別検出状況は、GIIが6事例(60.0%)で、GIとGIIが共に検出されたのは4事例(40.0%)であった。またGIとGIIが共に検出された4事例のうち3事例でカキ提供が確認された(図2)。検出されたウイルス株を事例ごとに無作為抽出し、ダイレクトシーケンス法によりVP1領域(GI:381bp、GII:387bp)の塩基配列を決定することで遺伝子型別を行ったところ、GII.2が5事例、GII.4が1事例、GI.3+GII.2が1事例、GI.2+GII.2が1事例、GI.2+GII.17が1事例、GI.1,2,3,7+GII.2,17と多種多様な遺伝子型が検出された事例が1事例であった。



GII.2は、2016年度のシーズン初期から一部の自治体において、感染性胃腸炎患者から頻繁に検出されていたことから、次期流行の主流であると推定されていた。GII.2は、2013年度まで感染性胃腸炎患者から比較的頻繁に検出される遺伝子型ではあったが、主流として流行することはなく2013年度以降はほとんど検出されていない。このため低年齢層においてGII.2に対して多くの感受性者が存在することが推定されていた。このことから2017年度は低年齢層を中心にまん延していたGII.2が大人社会にも波及し流行したものと考えられた。

ノロウイルスによる集団感染の発生状況は、市中にまん延するウイルス株に依存しており、今まで主流ではなかった遺伝子型や変異株が今後も流行する可能性が危惧されることから、今後も発生動向を注視していく必要がある。